

研究課題 (テーマ)		人工呼吸器装着患者の早期回復を目指した支援における多職種連携の実態と課題：質問紙作成に向けた予備的調査	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部看護学科	講師	大西 陽子
分担者	看護学部看護学科	教授	城戸口 親史
	看護学部看護学科	准教授	河相 てる美
	看護学部看護学科	講師	寺内 英真
	看護学部看護学科	助教	竹口 将志
研究結果の概要			
<p>集中治療領域では人工呼吸器装着患者の残存機能の維持と回復に向けて、複数の介入を包括的に実施する ABCDE バンドル (A:覚醒トライアル、B:呼吸器離脱トライアル、C:鎮静・鎮痛管理、D:せん妄モニタリング、E:早期離床) が推奨されている。これに関連し 2018 年に集中治療室における早期離床・リハビリテーション加算が新設され、多職種連携が強化されつつある。しかし、ABCDE バンドルの実施率は 16-52%であり (Nakanishi et al. 2021)、その障壁の 1 つとしてチーム作りの不十分さがある。本研究の目的は、ABCDE バンドルの実施における職種間連携に着目し、チームが形成されてから機能するまでの過程を明らかにすることである。</p> <p>上記の加算算定要件を参考に、①クリティカルケア看護関連の研修を受けた看護師 2 名、人工呼吸器装着患者のリハビリテーション経験のある理学療法士 3 名、集中治療に従事する医師 5 名、合計 10 名にインタビューを実施した。分析では、チームが成長・成熟するプロセスを 4 段階 (形成期・混乱期・統一期・機能期) で示したタックマンモデルを参考に、多職種が互いにどのようなきっかけや関わり合いによりチームとして機能していくのか、その要素を抽出しプロセスとして記述した。</p> <p>分析の結果、ABCDE バンドルの実践における多職種連携は、形成期において&lt;救命の先を見据えた連携不足の実感&gt;&lt;新型感染症をきっかけとした連携の促進&gt;等を契機にチームが形成されはじめ、混乱期では&lt;共通言語となる専門用語を理解する難しさ&gt;&lt;鎮静や抜管に関する判断・思考のずれ&gt;等が生じ相互理解を深めることを試みていた。さらに、統一期になると&lt;毎日の目標共有&gt;&lt;多角的に捉えた患者像の共通理解&gt;等が定着し、機能期では&lt;連携による患者の安全担保&gt;&lt;ABCDE バンドル実施に関する意見交換の活発化&gt;等により、互いの専門性を統合した実践と評価を繰り返していた。対象者らは、このプロセスを辿ってきたことを振り返るなかで、多職種がチームとして機能するようになったことや患者の早期回復を実感していた。</p> <p>現時点で抽出した要素は重症患者に限らず一般患者にも共通する要素も含まれているため、ABCDE バンドルの実践に焦点化した詳細な分析が必要と考えている。</p>			
今後の展開			
本研究結果は第一報として学術集会にて成果公表すると同時に、研究結果の一般化を目指しデータ収集を追加する予定である。			